

オクラが大きくならない

子どもの栽培活動に、保育者はどのようなねらいや願いをもって実践していますか。また、子どもは、どのような思いをもって、栽培活動をしていますか。ものと向き合う活動とは違い、子どもは栽培を進める過程で、思うようにならない時に、「失敗かな」と感じる体験をします。そして、自然や他の生き物との関わりなど、多くの刺激や情報を得て長期間取り組む必要があります。この事例では、このような体験場面から出た、「どうして?」「そうだ!」「やってみよう!」に、保育者がとことん寄り添うことで、子どもの感性や観察力が磨かれ、問題を乗り越えるために情報を集めるなど、考え合って行動しています。あきらめずに栽培活動をする子どもは、「失敗は大発見のもと!」との充実感を味わい、「科学する心」が育まれる体験をしています。

岡崎市豊富保育園

3・4・5歳児

毎年、クラス(3～5歳児の縦割り保育で約25名)の子どもたちが相談をして、夏野菜の栽培物を決めている。E組は、夏野菜の本に載っているオクラの花を見つけ、「オクラのきれいな花が見たい!」と、提案する子どもの声を機に話し合い、オクラを育てることになった。オクラの種をまき、「大きくなーれ」と声をかけながら毎日水やりをし、花が咲き、実を食べることを楽しみにしながら観察していた。



場面 1. 「キュウリは大きくなっているのに、オクラが大きくならない!」

<6月>

- ・2クラスがキュウリを育てており、大きくなっていく。キュウリの育ちに比べて、E組のオクラはなかなか大きくならない。そこで、キュウリを育てている5歳児から、「キュウリは、水をたくさんやって、大きく育てている」との情報を聞き、オクラにもたくさん水をやるようになる。
- ・それでも、大きくならない。元気がなくなったようにも感じた子どもたちが、絵本や図鑑だけではなく、今度は栽培の本で調べると、「オクラは、お水をやり過ぎてはいけない」ことが分かった。水遣りは土が濡れる程度にした。

場面 2. 「大変!オクラが食べられちゃう」

<6月下旬>

ある日、オクラの異変に気づいた子どもたちは、話し合いを始めた。

- Aさん:「うわー黒い虫がいっぱいだよ」
 Bさん:「これは、アブラムシだよ!」
 Cさん:「みんなのオクラが食べられちゃう」
 Dさん:「違うよ、大きくなるお手伝いをしているんだよ」
 Cさん:「えーそうかなあ?」
 保育者:「このままでオクラ大丈夫かな??」
 Cさん:「きっと、食べられちゃうよー」
 Bさん:「どうしよう」

オクラに、アブラムシがいっぱい



元気がなくなってきた…どうしよう

子どもたちは、毎日、観察をしている。オクラはアブラムシに食べられて、段々と弱ってきてしまった。

場面 3. 「テントウムシでオクラを守ろう」

<6月末～7月中旬>

- ・虫への関心が高い子ども2名が、図鑑に、「テントウムシは、アブラムシを食べる」と載っているのを見つける。
 Aさん:「テントウムシのご飯って、アブラムシなんだって」
 Bさん:「本当だ!え!大きくなるまでに、1日100匹くらい食べるって書いてあるよ」
 Aさん:「じゃあさ、オクラのところにテントウムシ連れて来たらいいんじゃない?」
 そして、テントウムシを探し、3匹ほど見つけては、オクラのところに留まらせていた。
- ・2人の行為はクラスの子どもたちに広がり、家や園庭・花壇などの様々な場所から、連日テントウムシを探してきて、3匹くらいずつオクラに留まらせることを続けた。
- ・子どもたちはアブラムシがいなくなったことに気づき、先生がアブラムシを捕っていないかを確認した上で、「やっぱり、テントウムシが食べたんだよ!」「テントウムシのご飯なんだもんね!」と、確認し合った。クラスみんなは、問題が解決して安心した。
- ・ようやくオクラは元気になり、待望のきれいな花を咲かせた。
- ・その後、実を付け始めたことに気づいた子どもたちは、「あ!オクラができてるよー」「早く食べたいなあ」と、収穫を楽しみにしながら世話を続けた。

場面 4. 「テントウムシのことを教えてあげよう」

<7月中旬>

- ・パプリカにアブラムシが増えたクラスに、テントウムシで解決することを伝えた。
- ・パプリカを育てている子どもたちは、E組のオクラにも同じようにアブラムシがたくさんいたことや、テントウムシを探して、オクラの所に運んでいるのを見ていた。そのため、**E組から情報を聞くと、すぐにテントウムシを探して、同じようにパプリカにとませ、アブラムシの問題を解決した。**

場面 5. 「おいしい！」

<7月中旬>

- ・オクラを収穫した。切ると、星形の切り口のかわいさに歓声が上がリ、どの子どもも感動していた。緑の野菜に対して良いイメージをもっていない子たちには、予想外の魅力的な星形に驚き、喜んでいた。
- ・連日、収穫できるようになる。E組は特に野菜嫌いな子どもが多くいるが、全員がオクラの収穫や食べることを楽しみ、進んで口にしている。かわいい形や、みんなで育てた楽しい経験から愛着が湧き、「食べてみよう」という気持ちが芽生えた。

場面 6. 「オクラ、2度目の大ピンチ」

<7月下旬>

- ・オクラを、みんなでおいしく食べる日が続いた。しばらく経ったある日、再度、オクラの葉にアブラムシが付いていることに気づいた。
 - ・「どうしよう！」「またアブラムシだ！」「テントウムシを探そう！」と、早速、テントウムシを探し出す子どもたち。しかし、見つからない。
- 子ども：「ねー先生！！テントウムシ全然いないんだけど！！どうしよう～オクラが食べられちゃう」
保育者：「テントウムシしかアブラムシ食べてくれないかな？」
子ども：「ダンゴムシは？」と言い、そばにいたダンゴムシで試してみるが、すぐに丸まってしまい、動いても葉まで上がる様子はない。「ダンゴムシはだめなのか」と、見込みは薄いと感じる。- ・**「ダンゴムシではうまくいかない」と、分かった子どもたちは、それからオクラの所にアリやバッタを連れて来るが、アブラムシには大きな変化が見られなかった。**

場面 7. 「テントウムシって、えらいんだね！」

<8月>

- ・「幼虫なら、アブラムシ食べるかも？」と、見つけた幼虫をオクラの所に連れて来て観察を続けた。確かにアブラムシが減ったが、同時に葉っぱも食べられてしまった。
- 「ねえ！！葉っぱは食べちゃダメだよー！！」
「アブラムシだけ食べて、オクラを守ってくれなきゃねー」
「やっぱり、オクラを守ってくれるテントウムシって、えらいんだね！」
「すごいね！！」



場面 8. 「大きくなり過ぎたら食べられない！」

<8月>

- ・アブラムシ問題も収まり、オクラは連日収穫できた。野菜嫌いの子どもが多かったが、全員、オクラを進んで食べていた。ある日、大きくなったオクラの収穫を喜び、いつものように給食室に持って行くと、「これは、大きすぎて、硬すぎて、食べられませんか」と、教えてもらい、大きなオクラは保育室に持ち帰った。
- ・「硬すぎて、食べられないんだって」「どうしよう！」などと話していると、中を見たくなくなった。**切ってみると、きれいな星形が現れ、この切り口に驚き、遊びに使えないか考えた。**「食べられないなら、遊びに使おう」と、他の野菜の時と同様に、ままごとのご馳走にした。保育者が、スタンピングができる環境を設定すると、以前の体験を思い出し、スタンピング遊びを楽しんだ。

[考察]

- ・子どもの疑問の言葉は、つぶやくようにすつと何気に出るが、すぐに消える。この言葉に即座に、「なんでだろうね」と返すことで、その疑問が「思考する」ことになっていく。保育者が意識することで、子どもの「なんでだろう？」は、何気ない生活や遊びの中で溢れ出るようになった。
- ・大切なオクラを、アブラムシ問題で枯らせてしまうかもしれない“不安感”や、もう実が生らないかもしれないとの“失敗感”を共有している子どもたちは、試行錯誤の末に解決すると、「テントウムシが一番！」との大発見も共有した。さらに、テントウムシが見つけれなくなった大問題では、他の虫で試すが、上手くいかず、「やっぱりテントウムシってすごいね！」と、再確認することになった。保育者が、子どもの疑問や探究心にとことん付き合い、納得がいくまで試したことで、多くの主体的・協働的な学びをした子どもは、大きな満足感を得るにいった。